

大谷學會春季公開講演會要旨

信心の現在性

——「念佛と餘善」——

本學短大
學部教授 藤原幸章

「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」とはわれわれの信心のすべてであつて、ここでは眞實なるものは念佛一つよりほかにはない。ところで念佛一つがまことうけとられるためには必ず信心を要とする。然らば信心とはどのような構造をもち、それはわれわれの行に對してどのように働くものであらうか。善導は『觀經』の三心を結釋して「三心既具無行不成」とまでいうている。これは信心さえ確かであるならばいかなる行も成就せざるはないとの意味に解釋せられる。とすれば信心と行業、念佛と餘善の關係はどのようにうけとつたらいいいのであらうか。これが私のテーマである。そうして私はこの場合特に善導の行業論を手がかりとしようとおもう。

念佛は佛の本願に誓われた正定之業であり、自餘の諸善は佛願に順じない行であるから全く比較にならないとは、善導淨土教の根本基調である。然るに善導はまた一面われわれの三業起行の上にも眞實の行を認めている如くでもある。このことに師の著作中特に『具疏』の上に顯著であるが、既に本疏たる『觀經疏』そのものの上にも充分に認められるところである。それ

ゆえに、善導の提撕をうけた法然の信仰につながる淨土門の諸派、特に西山系の人々の間には早くから三心の信心を介する諸善の廻りが強調せられて來たところであるし、宗祖においてもまた謙抑ながらこのことが説かれている。（特に晩年の書簡等に於いて）。然しながら善導と雖も三心の信心さえ確かであるならば、三業起行が直ちに皆眞實となるといい切る程樂天的ではなかつた。このことは同じく三心釋における深刻を極めた人間内省の告白において明らかである。それゆえに「三心既具無行不成」といい放つた行も、現實には「眞實信心の稱名」に限られるべきであらう。そうしてこのことさえ決定すれば正定業の念佛を中軸としてわれわれの身口意業の上にもそのひろがりがあることが認められてもいいであらう。蓋しかくの如き擴がりの上にこそ眞實の信心がわれわれの現在に働く具體相があり、念佛者の豊かな日常があると考えられるからである。信心は一度び獲て後は静止したまま動かないという如きものではなく、常にわれわれの主體となつて現在に働き出るべき善のものである。それゆえに信心はいつとり出してみても時々刻々が現在であり、いつでも珍らしく新しいのである。（『御一代問書』）。このような信心の現在性こそ信心の根本性格であつて、それはかの二種深信において適確に表わされている。ここでは先ず機の深信において「自身現是罪惡生死凡夫」と示される。それは昨日でもなく明日でもない。正しく現在が罪惡深重であり虚假雜毒である。しかもそれは同時に「曠劫以來常沒常流轉」という過去をうちに包みつつ「無有出離之緣」の未來を孕む、いわば絶對の現在である。それゆえに「自身現是罪惡生死凡夫」という現在

において遠々の過去から流轉し來つた自己が知られ、同時に未來永劫に出離の緣なき自己が知られる。されば信心における自己はいつかなる場所に於いても現在が雜毒虛假であるというより外はない。法の深信に於いても亦同じく絕對現在において示されている。「禮讚」の深信釋には特に法の深信に於いて、「今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至……」とその現在性を表わしている。ここでも同じく明日でもなく昨日でもない。今、彼の願力に乗るのであり、「今日今時聞要法」(『法事讃』)である。かくして信心に於いては常に現在が中軸となつて現に今自己は墮ちるものでありつつ、從つて今現に救われなければならぬといわれるとき、曠劫の過去から未來際を盡して一切の時空がこの一念に極まるのである。それ故に信の一念は「信樂開發時剋之極促」といわれ、同時に「廣大難思慶心」と讃えられるのである。かくして、ここにおいては常識的に過去から現在へ、更に未來へと移行行くものではなくて、逆に現在が軸となつて過去が、また未來がここに極促せられ、常に現在から現在へという形式をとる。信心はいつでも新らしく、一つことを聞いても常に珍らしいといわれる所以である。まことにこのような現在性こそ信心の根源的性格である。善導が廣く身口意の三業に及ぼした正行とは、正しくこのような現在に働らく信心の具體的表現に外ならない。それゆえに善導における正行とは「往生經の行に依つて行する者」であるからとか、信心によつて淨化せられた行であるから正行であるのではなく、現在に働らく信心に支えられて煩惱具足のわが身が煩惱具足と知られ、それゆえに定散の自心をはなれた行であるからに相違ない。從

つて信心の現在に於いては、常に私の行は批判せられて雜毒虛假となり、信心さえ確かであるならば私が思い上つてこの雜毒の善を回向する如き愚かなことをする筈がない。信心が特に「信心の智慧」といわれる所以である。かくして信心は常に現在に動いて行の批判者として働らき、雜毒を雜毒としてありのままにしらしめると共に、このもののためにする大悲に對して慚愧と報恩の根源となる。從つて信心の智慧に入れば依然として煩惱具足の身でありつつ、「そくばくの業をもちける身」が悲しまれると同時に、「たすけんとおぼしめしたちける本願」がかたじけなくよろこばれる身となつたのであり、「信心の智慧に入りてこそ佛恩報ずる身」となつたのである。ここでは機の深信は單なる自己否定に止らず、虛假不實の自己と知るゆえにこそ愈々自らが愼しまれる。既に自らの不實に氣付くことそのことが私の現在に働らく信心の相に外ならないのである。不實なものとは他人ではなくて自分自身であり、從つて救われるものも不實な自己そのものと信知する時、その時無底の慚愧と無限の責務が荷われてくる。「親鸞一人がためなりけり」との叫びがわき上る所以である。

かくして信心は現在の自己の軸となつて、昨日でもなく明日でもなく今日今時自己は墮ちるものでありつつそれゆえに救われるものであるとの確信を内に包んで、われわれをして「佛恩報ずる身」と轉ぜしめる。まことに信心が私において働く具體相こそ「應報大悲弘誓恩」といわれる報佛恩の世界である。ここでは現在の信に立つて未來成佛の確信に支えられると共に曠劫來流轉の過去に對しても却つてそこに世々生々の佛恩が仰が

